3.11 和の輪

3．11から1年。
それぞれが経験してきたこと。
いま、滋賀で暮らすわたしたち。ひとりひとりが、
思い、かっとうし、感じていること。
「希望」、「（乗り越えたい）壁」、・・・。

バタフライ効果と名付けられた、
気象現象を表す用語がある。
「小さな蝶の、そのわずかな羽ばたきが
遠く離れた彼方の嵐を引き起こす」
この世界が、ひとりひとりの小さな暮らしの集合体ならば、ひとりひとりの暮らしがちょっと変わるだけで、新しい世界が生まれるってことを、信じていきたい。

野良師　前田壮一郎　余呉

あれから一年

3.11 後に私の生活は確かに変わりました。いいのか悪いのか、、、。以前はパソコンとは全く無縁な暮らしでしたが、今や、朝、晩欠かさず、メールのチェック。3.11 後に「ネットワークあすのわ」が生まれ、たくさんの人とつながりました。私自身が今までの、好きなことだけして暮らすことから、一歩、踏み出して、社会勉強中、というところでしょうか。
3.11 後に感じた恐怖は、今では遠いものになりましたが、あの時、泣いたり、怒ったり、笑ったり、本気で仲間と考え、行動したことは、今でも心の芯となって燃え続けています。この世界にはいろんな問題があって、考えると気が遠くなってしまいますが、もっとシンプルに自分の足元を見つめながら、絶望ではなく、希望に向かって暮らしていきたいです。この地球に命を繋いだ者として、意思表示を続けるだけ。「核のない世界を！」「原発はいりません！」

村木奈々子　（ネットワークあすのわ）

3.11から1年がたって……

あの時、私は娘を迎えに行く車の中にいました。揺れはわからなくて、かけてたラジオからDJのあわてる様子が聞こえて、「ああ地震か」と知りました。その後、ラジオ番組が通常じゃなくなって、大変なことが起きたのだと。そしてそのあとの日々……。
お腹の中に居た新たな命は、夏に生まれてくれて、現在6ヶ月です。それだけの時間が過ぎたのですね。
原発のことさえなければ……と、被災地を思うたびに、どうしようもない、遠方に暮れた気持ちになります。
過ぎる時間に流されそうになる そんな気持ちを、自分の元に引き戻し、なにができるか考えています。
毎日、家族がそろってごはんを食べて、元気に働いて遊んで、川の字になって眠る。それが、心からありがたい。
命をかけても守りたいのは、こんな、なんでもないような日々の暮らしなのです。
だから、私たちはなんとしても『原発のない世界』を手に入れなくては。
3.11後を生きる私たちに課せられたミッションだと思います。

2012年3月 綾牧生

今やっていること

山本　綾美

震災後、夫婦でたくさんのことを話し合いました。そして互いに確認しあったのは、原発はいらん、災害対策しなあかん、子ども達が大事ということでした。そして「あすのわ」に参加して色々勉強させてもらい、もっと具体的に自分達の暮らしを見直す気持ちになりました。

原発の作った電気は可能なら使いたくない、大きな地震が来たら壊れそうな今の家は恐ろしい、子ども達にたくさんのことを経験させてあげたい、と言うことを解決するために現在、家を改築しています。改築に伴い薪ストーブ・薪風呂釜・太陽温水器(発電は今後検討)を導入、改築作業もハーフビルドでやり“ゆっくりと時間をかけながら作っていくという事”を自分自身に教えているところです。　改築だけでなく、地元の愛林家の方達の協力で、木の伐採から集材搬出・製材まで自分達でやってみることができました。立っている木から柱を作る、と言うのはとても面白いことでした。この柱を使って、アトリエを増築する計画をしています。

便利はすばらしいことです。でも、自分の手で作り出すことはこんなにも面白い！もっともっと、ゆっくりに慣（成）れますように。

311以降、次々に愕然とさせられる現実と向き合おうとする中、
この一年間、いろんな人々のこころと出会いました。

３１１以前の、ほのぼの生きていた心のアンテナでは、
決してつながれなかった人々の心に、
その存在に、出会うことができました。

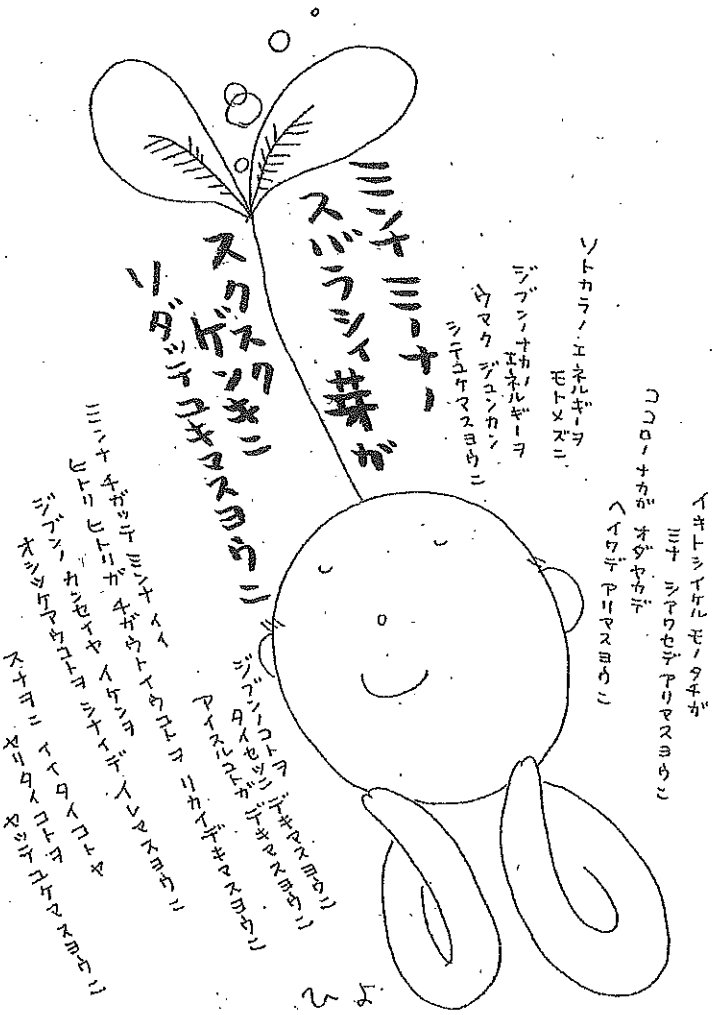
色んな命が、色んな命と響きあって、色んな色を生んで、
また次の命と響きあって。。。
そういう、瞬間瞬間の連続であったような一年でした。

その響きは、様々な闇の思惑の渦の中、とても凛としていて、
そして泣くときも笑うときも怒るときも、
エネルギッシュで、愛がいっぱいでした。

こころをあっためて響きよい心で生きること。。。

私も、自分の目の前にいる私のこどもたちが、
そんな喜びをどんなときも心に持って弾ませてくれるよう、
どんな時も、こころをくすぐる母でありたいです。

八木美砂子



子どもたちへ。

311からしばらく、私は母として、大人として、苦しい日々を送りました。災害、原発、放射能。あなたたちを守れるだろうか。未来に希望を残せるだろうか。

私は本に関わる仕事をしていて、これまでたくさんの子どもたちと一緒に本やおはなしを楽しんできました。喜びを分かち合い、生きることは素敵なことだと信じてきました。でもあまりにつらい現実を前に、一時期、何を信じて良いのか分からなくなりました。

人間には希望が必要です。絶望したら生きていけないのだと思います。(心理学者フランクルのアウシュビッツ体験記『夜と霧』を読んで感じたことです。)私が立ち止まってしまった311後も、あなたたちは変わらず本やおはなしを求めて来てくれました。そして「また読んでやー！」と言ってくれました。わたしにとっては、これが「希望」です。だから今は、しっかりとこの仕事を続けていこうと思っています。

放射能という負の遺産を残してしまった責任を負いながら、残りの人生を生きていきます。あなたたちの未来を少しでも明るくするために。

311からまもなく1年となる日に。　川嶋智美

対話の作法———「自分たちで自分たちのことを決める」という経験がないわたしたち

根木山恒平

3.11 のあと、いろんな人と意見交換することが増えました。それまでは、みんな日々の忙しさの中で、「真剣に議論する」ことがあまりなかったような印象があります。

他方、元来、議論好きなわたしにとっては、そうしたみなさんとの意見交換、議論の機会が増えたことを、ある種、前向きにとらえていました(3.11 のあとしばらくは)。

ただ、実際のところ、しばらくすると、そうした前向きな心もちとは裏腹に、歯がゆいような経験をすることが積み重なりました。そう、議論がかみあわないのです。(きっと同じような経験をされた方もいるのではないでしょうか？)

同じ方向を向いて集まったはずの方とも、また、それまでわかりあえていると信じて疑わなかった方々とも、大小さまざまな部分で「違い」があることが判り、そして、その「違い」をうまく共有することができないと、対話がうまくいかなくなることもありました。

対話の作法って？？？

——それが、3.11 後のわたしの中に常にある課題です。

考えてみると、わたしたちは、残念ながら、大人にいたる育ちの過程で、いや、大人になってからも、「自分たちで自分たちのことを決める」という経験がほとんどないのです。

この「自分たちで自分たちのことを決める」という未知の経験、いとなみをまずは近くにいるみなさんと丁寧にさぐっていきたいなと希望します。(よろしくおねがいします)

福島原発事故直後は、おそらく多くの人がそうだったように、私も例に漏れず本当のことがどこにあるのか手探り状態で、とても混乱しました。そんな中で子どもを守って行くために、本当のこと・大切な情報を人と共有したいという思いがふつふつとわき上がり、原発や放射能のことを話そうよと、毎週のように友人たちと集うようになりました。見た目はお菓子パーティさながら、色々な資料やそれぞれが見聞きしてきた情報を話し合いました。毎回、美味しいお菓子をぱくぱく食べながら、政治や原発利権の話や内部被爆のことなどを語っていたそんなある日、友人の一人が「"NUKES"って何？なんて読むの？ぬけす？」と言い、そこに集う半数近くが実は読み方を知らなかったということがわかり、大爆笑。それからはこの集まりを"ヌケス"と呼ぶようになりました。毎回"ヌケス"は、このユルく関西ノリ的なまぬけ感満載のネーミングと集う仲間のおかげで、厳しい現実を目の前にしても、お互いをとても和ませてくれています。近頃は、それぞれの家庭で、放射能デトックスに効果があると言われている乳酸菌やＥＭを培養し生活に生かす取り組みをワクワクしながらしています。

私にとって震災後のこの一年は、色々なことが変わった一年でした。以前よりも増して、人とつながりたくなり、ちっぽけな自己顕示欲がどっかへ吹っ飛んでしまい、子どもや家族と過ごす時間を幸せに大切にしたい思いが強く湧き、食事や空気や水や大地など今まで当たり前に思っていた些細なことに感謝したくなりました。

社会に対しての意思表示の大切さや難しさを知ると同時に、今は日本社会が良い方向へ変わることの困難さを見せつけられています。放射能汚染のことのみならず、教育現場での右傾化、経済問題等々、心配なことがたくさんあり、子どもたちの未来のことを思うと、正直なところ辛くなってきます。

この先どうなるかわからない、どうにでもなる可能性が潜んでいる、だからこそ、そこに希望を見出していきたい。震災後感じた絶望感の中で、私は人とのつながりを通して希望を感じる経験をしました。

しかし、一年経った今、社会は本当に変わり得るのでしょうか。子どもたちが大人になる頃、そのそう遠くはない未来はどうなっているのでしょうか。それから先の孫の時は？そしてその次の世代は？

多くの人が本当に大切なことを考え始めたのかもしれない。これは事実としてあるのかもしれない。それでも今もなお厳しい現実で、通りかの最悪の事態だけはどうか避けられますようにと、平凡で非力な一主婦は希望を託し暮らしています。凡々と流れ得る日々を心から大切に感じながら。幼い子たちと楽しく過ごせる幸せで恵まれた状況から、私が今、考えたことを少し綴りました。　(草津市 三児の母、貴月)

あれから1年、あれだけの事が起こったというのに、起こったにしては、表面上は何も変わらない私たちの日常があります。あの大惨事、残ったがれきの山、放射能汚染ー持っていた物の豊かさ、築いたものの強固さが、そのまま被害の大きさ、処理の困難さとなって振りかかってきたーそんな災害の実態を目の当たりにして、それでも便利で豊かな生活をきっぱり手離せない自分や、社会の変化もはっきり確信を持てるほど鮮明ではないことに、モヤモヤした気分でいます。

もうひとつ、被災地にボランティアを送り出すために、現地とやりとりをしている中で気付いたこと。私たちはすっかり準備や予定で「先回り」するクセがついていて、未知・未定であることへの抵抗力がなく、「待つ」とか「その場で判断する」ことを嫌う社会になっているということ。

豊かさと安心…それを求め続けてやってきて、辿りついたところは、LIVE 感＝生きる実感のない窮屈で脆弱な社会だったのかな、と思います。

だから私は「楽しむことを後回しにしない」「出たとこ勝負を楽しむ」「生活の贅肉を落とす（家内の整理）」を心掛けていきます。

平井育恵

（しがNPOセンター/大津に冒険遊び場をつくろう会）

いとこが、死んだ。
小さい子どもを残して。
ワタシと同い年のいとこが、死んだ。

311から1年。
状況は何も変わっていない。
放射線も、私たちの心も。

時は過ぎる。容赦なく過ぎる。

想像力豊かな感性と論理的な思考力を
いつか手に入れる日まで・・・。

おさむくん、無力でごめんな。
鎮魂の祈りを込めて・・・。

なかのかずこ

あとがき

2011年3月11日におこった未曾有の大地震、巨大津波、そして、東京電力福島第一原子力発電所の事故。ほんとうにたくさんの人びとが生命をおとし、また、住むところや、仕事の場を失い、さらに、見ることも聴くことも嗅ぐこともできない放射能汚染の恐怖にさらされています。

あらためてご冥福をお祈りするとともに、被災された方々が、また日々の暮らし、いとなみの活力をとりもどされることを願わずにはおれません。

そして、あの3.11から1年が経ちました。ここ滋賀に暮らす人びとの中でも、この1年の中で、被災地に赴き、現地の方々と作業をともにされた方、復旧復興のためと義捐金や支援金を送られた方、また、子どもの未来を願い、放射能の恐怖という未知のものへのなす術を手さぐりされてこられた方、若狭湾の原発をうれい、ここ滋賀での防災について真剣に考えておられる方等々、人それぞれに、それぞれの考えや感覚により、さまざまな経験をされてらっしゃると思います。

さて、3.11は、わたしたちに、なにを問うているのでしょうか？

あまりにもたくさんの問いがあるように感じています。わたしひとりでは、とても受け止められない。ちょっと思い違えると、絶望感、虚無感にもつながりかねない、そのくらい多くの問いにわたしたちは応えていかなくてはならない。それが現実でしょう。

そうした中で、過日、サティシュ・クマールさんという現代の「ガンジー」とも称される古老を滋賀に迎え、話を聴く機会にめぐまれました。

サティシュ・クマールさんがおっしゃっていたことを自分なりに解釈して、ご紹介するとこんな感じになります。

「わたしたちは、ついつい、ものごとの『結果（ゴール）』に目を向けすぎてしまう。ただ、実は、結果ということも、ひとつの通過点にすぎない。結果のつぎには必ずなんらかのことが続いていて、結果と言ってもそれは『過程（プロセス）』の一部なのです。つまり、わたしたちは、つねに過程を生きているのです。でも、実際には、結果に目を向けすぎて、過程をおろそかにしてしまうことがある。くりかえします。わたしたちはつねに過程を生きていて、それはずっと続いている。目の前にある暮らし、いとなみ（過程）を楽しく、大切にしてください。過程を楽しく生きることが、わたしたちの人生を豊かなものにしてくれるのです」

このお話にわたしはたいへん感銘を受けました。わたしたちは、想像を絶する巨大な相手、構造、問題を前になにができるでしょうか？

いま目の前にある暮らしの中で、近くにいる人びとともに、それぞれが感じていること、思っていることを寄せ合い、交換し、共有する過程を丁寧にしていくこと、そのいとなみを楽しく、大切に生きていくことに希望をもつことができました。

この「寄せがき集」が、みなさんとの対話と共感の一歩を踏み出すきっかけになればうれしいです。（ね）

あまいろだより増刊号
「3.11から1年しんぶん」
発行：2012年3月15日
碧いびわ湖
編集：なかのかずこ、ねぎやまこうへい